



連新雜陳列

兼書の遺書

伊地知文庫  
文庫20  
226



延寶四年月 智護院道寬親王  
兼壽近善 秋以陳列

難 黑川由純 昌純才子

陳 兼壽

評 風早中細言實種



何しは江橋江かづゆつりる百龍乃  
連歌く龍氏江せら音あり又陸ゆき  
平系判乃廻をか

又し也現えしとそ夏春乃既

雜云

あ中らたさるふあふし又そ貴乃  
はあ人しし事うらゆせし人  
憚あ事れ他例あしきあ  
乃事あ













師のかぬのやを行あらんは事一とせ  
あらし視象之牙知其大于承見猩之尾知其  
小於豹也

りく涼一棧りと信

る様よのりかる方好む

雜云

面八分の中一棧あらし

陸云

る棧はあらしの向かひあらしを指

かゝるは雲あらしの連歌

ふ棧事しる

列を樓指あらしの初よあらしの末鷲は白く  
や鳥はあらしの初あらしの初あらし  
初あらし連歌しる棧し末見しあらし  
あらしの初あらし中流流転あらし  
あらしの初あらし

夕金時り斬る志し

雜云

あらしの初あらし

陸云

あらしの初あらし

あらしの初あらし

初巻の巻名

判云志しつら行のしるしを  
し自由なるかへし  
風系一のしつら行のしるしを  
つとよ申の初巻のしるしを

ちるちるのしるし

判云志しつら行のしるしを  
し自由なるかへし  
風系一のしつら行のしるしを  
つとよ申の初巻のしるしを

行のしるしを  
白雲のしるしを

初巻のしるし

判云志しつら行のしるしを  
し自由なるかへし  
風系一のしつら行のしるしを  
つとよ申の初巻のしるしを

為秋とていふは此處に

難云

さる此處に池の中へおぼゆる  
しつゝあそびていふと下へさし  
しつゝあそびていふと下へさし

難云

判日由かたははしつゝあそびていふと下へさし  
再々いふと下へさし

枯葉とていふは此處に

よめ

刈取に海河とていふは此處に

難云

いほら刈とていふは此處に

陳云

刈取に海河とていふは此處に  
刈取に海河とていふは此處に  
刈取に海河とていふは此處に

木下り秋とていふは此處に

難云

木下りのよめとていふは此處に

陸云  
ひ乃洋流の流

判云せししぬらたきまらるる小舟下し海回似  
たる。溜みかきしと云ふし事。は宮本上流  
と書り過りぬらるる道に在りたる也

道  
道ありては

陳云  
道ありては

判云海はし。案はかくらり速き  
か下れ難と。案はありぬらぬらぬら  
りては難と。案はありぬらぬら

月乃新のまじりては

陸云  
新のまじりては

陸云  
新のまじりては

陸云  
新のまじりては

判云宮庵里はし。案はありぬらぬら  
りては難と。案はありぬらぬら

新のまじりては

新のまじりては

陸云  
新のまじりては











と稱ふ世中人の心下平の業と云はれは傳ふ分、  
汲りては傳ふ心しる。又傳の類  
よこすにあつては、心下連奇の評と云ふは  
帝代の曲事と云管窺天。ことごとく彼世と  
の好らぬ心下つらひなる情ありは、  
け通乃嘉徽と云ふと、天下連奇と評し  
るよ、後智類人、果親と云ふ事と傳ふし  
る。と云ふは、  
世は流るるをほく政

難なるは、  
判者云はく、はり利し、まよか、す地なる  
とほく世は流るるをほく政

# 初春也 伝承 親人の心

難云  
人の心は、  
子孫の心は、  
初春也 伝承 親人の心  
と云ふは、  
と云ふは、



題 歌云 夕紙むつし一紙し

歌云 夕紙むつし一紙し

歌云 夕紙むつし一紙し

別云 夕紙むつし一紙し  
梅河知くも松よ笑しん之れ氣味ありけり  
いそぐに又露かかるとの梅ぞ知る新よ  
はれんち神むつし一紙し一紙し一紙し一紙し  
すもまをむつし一紙し

漢河嶋は吹たらくの朝島

ニラ

望平乃と野々落可ぬ

雲乃霞尾は又むつし一紙し

福葉又ほく回く昔も

歌云 夕紙むつし一紙し

歌云 夕紙むつし一紙し

歌云 夕紙むつし一紙し

歌云 夕紙むつし一紙し

歌云 夕紙むつし一紙し

歌云 夕紙むつし一紙し

風亂しそらあはし

美しき山にさしけるもよしのをみゆきあけ。  
わすしき下はあはれなきもよしのあはれを  
待てこころにたはれなきもよしのあはれを  
のぼしそらよけし風もよしのあはれを

あまのこころの  
あまのこころの  
あまのこころの

あまのこころの  
あまのこころの  
あまのこころの

あまのこころの  
あまのこころの  
あまのこころの  
あまのこころの  
あまのこころの  
あまのこころの  
あまのこころの  
あまのこころの

あまのこころの  
あまのこころの  
あまのこころの

あまのこころの  
あまのこころの  
あまのこころの  
あまのこころの  
あまのこころの  
あまのこころの  
あまのこころの  
あまのこころの





龍云

一ノハ

海云

大ノハ

判云龍の向むるに

岐ノ音

深ノ音

此の音

龍云

龍云

龍云

一ノハ

一ノハ

一ノハ

一ノハ

一ノハ

一ノハ

一ノハ

白中

龍云

龍云

一ノハ

しらべし 延鳳家 大いなるものなり  
のふり 如く ぬふり ぬふり  
延鳳 ぬふり ぬふり ぬふり ぬふり  
ぬふり ぬふり ぬふり ぬふり

判を 延と... 案 案 案 案 のの のの のの  
月の 月の 月の 月の 月の 月の 月の 月の  
し ち ち の 事 事 事 事 事 事 事 事  
と とう とう の ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ  
く ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

月 月 月 月 月 月 月 月 月 月 月 月  
奇 奇 奇 奇 奇 奇 奇 奇 奇 奇 奇 奇

# 赤ぬぬぬぬ 幾く高代

延鳳 赤ぬぬぬぬ 幾く高代  
延鳳 赤ぬぬぬぬ 幾く高代  
判を 判を 判を 判を 判を 判を 判を 判を  
る 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二  
本 本 本 本 本 本 本 本 本 本 本 本  
反 反 反 反 反 反 反 反 反 反 反 反  
お ね ね ね ね ね ね ね ね ね ね ね ね



判とやうにわたり戦くもたはよ  
吾等。事とし西代のころあつた  
今一戦く程よあつたもねたつた  
三

後ものよおまをたつた  
越の越わはあつた  
らとらつたあつた  
水よとらつたあつた

業漬の百

部云 姉つりてをよよ  
部云 前よよの評あり  
判云又よ法林

あや岩根よほりもね葉

はくし有りてはる葉  
部云 是根よよあつた  
部云 あつたの評を

判を又う保ねしを

新はのくねん屋を打

さくしんじりくはくしんじり

しんじり

離しんじり

難言 新の常本はの下の下にまじり

難言 新の常本はの下の下にまじり

難言 新の常本はの下の下にまじり

しんじり

判を又う保ねしを

判を又う保ねしを

判を又う保ねしを

書き白くはくしんじり

難言 判を又う保ねしを

難言 判を又う保ねしを

判を又う保ねしを









一笑

判云は... 考一カ地風象...  
付... 是事... 是事...  
... 是事... 是事...  
... 是事... 是事...

ん橋... 是事...

判云... 是事...

判云... 是事... 是事...  
... 是事... 是事...

年... 是事...

り... 是事...

判云... 是事... 是事...

判云... 是事...

判云... 是事... 是事...

判云... 是事...

判云... 是事... 是事...





わがれよりのにせし事一にせし事

あまのつとめあはれはまはれ

山うけく誰なるかゆはる

あまのつとめ

世に控ゆることとてかた友

難言 一かた友

世に控ゆることとてかた友

難言 一かた友

事にあまのつとめ

判るにけりし事たしむるゆりのあまのつとめ  
あまのつとめ 誰のあまのつとめ  
あまのつとめ

佛を化してかた友

難言 一かた友

あまのつとめ

あまのつとめ

洞とてかた友

雑  
不<sup>レ</sup><sub>レ</sub><sup>レ</sup><sub>レ</sub>

疎  
大月断

到<sup>レ</sup>又<sup>レ</sup>未<sup>レ</sup>海<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>心<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>留<sup>レ</sup>め<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>

臣<sup>レ</sup>女<sup>レ</sup>夷<sup>レ</sup>提<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>君<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>意<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>

わ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>正<sup>レ</sup>調<sup>レ</sup>終<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>ん

雑  
あ<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>ん

疎  
大月断

判<sup>レ</sup>系<sup>レ</sup>系<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>

源<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>ち<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>豊<sup>レ</sup>財<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>志<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>

雑  
あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>

疎  
大掌會の惣基主基の方二年の月間

こ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>

判<sup>レ</sup>白<sup>レ</sup>陳<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>余<sup>レ</sup>誰<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>志<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>  
あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>

當<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>當<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>故<sup>レ</sup>庭

雑  
台<sup>レ</sup>名<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>

疎  
當<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>こ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>

るるる 音のさくらさくら  
はなはな 音のさくらさくら  
判之皆言ふまじりて是を宮中事あり  
り候

夕鞠をゆめれ枝の影をく

吹くさくら風八青柳

判之 柳の影をさくら  
私のさくらさくら

さくらさくら 春の水

ねら西のあじろ眉

判之 柳の影をさくら

判之 さくらさくら

判之 さくらさくら  
案之 心敬昭代の例とあり

久は敵ハ土の久浦橋よま

判之 大は之味に家よりぬたあり

少堂山は木津河のさくら

かゝる事はさる事なりし事なりし  
たゞ又のたゞもやいふ事なりし  
の事なる事なりし事なりし  
判じし事なりし事なりし事なりし  
事なりし事なりし事なりし  
事なりし事なりし事なりし  
事なりし事なりし事なりし  
事なりし事なりし事なりし  
事なりし事なりし事なりし  
事なりし事なりし事なりし  
事なりし事なりし事なりし  
事なりし事なりし事なりし

たゞ又のたゞもやいふ事なりし  
の事なる事なりし事なりし  
判じし事なりし事なりし事なりし  
事なりし事なりし事なりし  
事なりし事なりし事なりし  
事なりし事なりし事なりし  
事なりし事なりし事なりし  
事なりし事なりし事なりし  
事なりし事なりし事なりし  
事なりし事なりし事なりし  
事なりし事なりし事なりし  
事なりし事なりし事なりし

元は妙の種を入相  
會よと鳴くもなをる村鴉  
まゝなみやうの杜乃下凡

たゞ又のたゞ

神はむく具可也なる事

難 高天原のわくら木のわくらなる事  
難 高天原のわくら木のわくらなる事

奥瑞の美別々く之は標の難なる事  
對えは秋のむ旦と理体つらん一難の事  
あ極せり又對えり方はりねの事  
森一なる事  
とけ面場もわくら木られたり又瑞廻り例  
の神はむく具可也なる事  
よはむく具可也なる事

つくる事ハをある道

難 宜慮  
陳 宜慮

對えは秋のむ旦と理体つらん一難の事  
あ極せり又對えり方はりねの事  
森一なる事  
とけ面場もわくら木られたり又瑞廻り例  
の神はむく具可也なる事  
よはむく具可也なる事

よりなる連歌仕由取書下其事多し  
初より浦焼火の海軍  
波も雲の海軍



享保一申ノ

見

貞實

